

本当の引っ越しまでの

「大きなおまけ」

赤羽美代子

私の勤務するR園は、1984年2月3日（行くわよ、兄さん）の日に移転しました。

当日は、兄さんの日にも関わらず、兄さん抜き、しかし、兄さんより頼もしい、園児の父母様方の力と汗の大活躍の日でした。

R園の位置する場所は、10数年前よりA・R・K計画（赤坂・六本木地域総合開発）事業が進めら

れ、1983年には、いよいよ園舎の周囲一帯は、家屋破壊の作業が開始されました。

毎日、バリバリと無惨に倒される大小、様ざまの木々を、登園、降園時に目にする園児たちは、怒りを身体一ばいに表わし、「先生ノ神様が大きくして下さった木を、倒すなんて、もう許さない！」
T夫も「そうだよ。Gちゃん（自閉症児）だって、

だまっているけど本当は、心の中で怒っているよね
ー先生」

そうした或る日、年長組の男児Sが「北方、領土を返せー」と、片手に拳を握って振り上げ、大きな声を張り上げました。Sの周囲の子どもたちも、Sの様に片手を振り上げ「ホッポリー・ヨー・ドゥ、カー・エー・セー」(・は特に力が籠る)リズム正しく連呼するのです。私はSに聞きました「Sちゃん、北方領土を返せて、どんな事なの？」S「僕たちは、木や草を倒したり、幼稚園を壊しに来るおじさんに『幼稚園や木を返せー』と、云ってるんだ」と、無念そうに、私の目をじっと見つめます。木陰で一と休みした時の、あの風の音、木の葉のおしゃべり、草や木と共に生きた日々が思い出され、Sはだまっていられないのです。

数日後、園舎前にT建築会社臨時事務所が建ちました。Sと友人たちは、降園時には、決まってT事務所の前に立ち、例の「北方領土を返せー」が始ま

ります。T事務所のおじさんたちも、幼ない子どもたちの連呼に合わせて「北方領土を返せー」と片手を振り上げて答えてくれるのです。

周囲の家屋を破壊する時の大揺れが、園舎に雨漏りをプレゼントしてくれました。そのダイナミックで力強い雨漏りは、昨日はあちらドドド。今日はこちらザザー。教師と園児は両手に容器を抱え、天を睨み「えりまきとかげ」さながらの足つきで、園舎内を駆け巡ります。その、姿のおかしさに、教師も子どもたちも、お腹を抱えて大笑い。部屋の戸は錆びつき、どんなに戸びら様にお願いしても動いてくれません。馴じみ深い園庭の遊具類は、先に移転先に行ってしまう、園庭も寒ざむとなりました。陽気症候群ぎみの教師たちですが、夕方になると、佻びしさ、淋しさを同事に味わう時を迎えました。

5分程先の、大きなホテルに隣接して、仮り住まいのプレハブ園舎が建てられました。

移転先の園庭は「都内には珍しく、緑がいっぱい

です」と、関係者は目を見はります。総面積1345坪の土地に、388坪の幼稚園舎（教会学校室も含む）が建ちました。

この緑の土地は、本当の引越し迄の大きな、大きなおまけだと思っています。

先ず、かつて、この地に繰り広げられた、優雅な歴史を紹介いたしましょう。

周辺の人びとは此の所を「田中山」と呼びます。明治時代に生糸で大変な成功をした、田中糸平氏の屋敷後で、かつては、現在の4・5倍の広さを持った土地であったそうです。広大な庭園には東海道五十三次の景色を形取り、当主は、お駕籠に揺られ、揺らりと揺られ、お庭の散歩を楽しまれたそうです。又、園舎の隣りには、格調高く、気品を保った洋館と純日本屋敷が、古色蒼然と鎮まって建っています。明治の初期に建築された、O子爵の屋敷です。その屋敷の内部は、柱一本に至る迄、きめ細かい細工が繊細にちりばめられ、施され、その美事さ

に、声を飲み目を見はります。明治天皇の、時どきのお出ましがあり、練瓦造りの古い馬小屋が並んでいましたが、今回壊されました。田中氏はこの屋敷を買ひ求め、客用の建物として用いました。その隣りに田中氏は、O子爵邸に劣らない屋敷を構えました（田中邸が、そのまま幼稚園として活用する話もあり、夢は枯れ野を駆け巡りましたが、都合により、田中邸は壊され、現在のプレハブになったのは、残念）

年月は過ぎ去りました。田中邸の広大な土地は、その後、幾つにも分割売買され、それぞれの大きなビルが建ち並びました。O子爵邸も、幼稚園舎・教会が建つこの土地も、数社の所有土地となりました。

園舎は、広い芝生に面し、古木の木々に囲まれています。庭の一隅には川の流れの後があり、大きな一枚石の橋が掛っています。古い五重の塔は、贅を尽くした昔の物語りを胸に秘め、静かにリンと建っ

ています。この一隅は、五十三次の何処の景色を形どったか、誰も知りませんが、子どもたちは、木の香が薫り、薄暗いこの場所を、小さな森と呼んでいます。更に、この森の奥へ入ると山中の細い身を思わせる、文学散歩の様な、ちよっとした下り道もあるのです。子どもたちは、この道を、トットトと下ると、今度は山の崖や又、力強く落下する水の音が、今でも聞こえてきそうな涸れた滝を、よじ登ります。

子どもたちにとって、この小さな森は、森の木と、鬼や天狗が仲良く互いに生かし合って存在している、聖なる空間なんです。

又、或る日、園児たちは先生に連れられて、庭から通じる（普断は禁止されている）散歩道を歩きました。都心にしては、大変静かな、大きなビルの裏道です。年少児は、年長組のお兄さん、お姉さんに、しっかりと手を繋かれ、初めての散歩道に緊張をしました。4分程度歩くと、道は緩やかな曲り道

となり、正面の視界が急に広がります。大きなビル群が重なり合う、一幅の絵のような景色は、幼児にとって、向こう側の世界を、こちら側の世界から眺めている気分になったようです。

又、ぐるりと後を向いて、緑の園庭に戻りました。次は二階に通じる、外からの非常階段（普断は用いない）を登り、二階を通過し、屋内の階段を降り、礼拝堂を通過して、園舎に戻りました。その間、全部で15分程の散歩でしたが、子どもたちは「先生、私、何処を歩いたのか、ちっとも解らない」「僕も」と、話し合っています。

やっとお部屋に戻りました。全員、横になり一と休みしながら、教師の語る「瘤取り爺さん」の昔話に耳を傾けました。「お爺さんの瘤を、鬼はエンヤ、エンヤと引っぱりました。とうとう瘤は、すぼんと、とれてしまいました」いつもなら、E夫、D介が抗議します「へえー、瘤なんか引っぱってとったら、血だらけだよ」「お爺さん、歩いて家へ帰

れないよ。救急車呼ばなきゃー」しかし、今、自分が経験した、ちょっと不思議な感覚の出来事で、昔話の世界を、抵抗なく受けとめているようです。

緑いっぱいこの園庭に、雨・雪が遊び舞います。陽光も、木の間を漏れて、ステンドグラスの欠けらの様に降り注ぎ、小さな森の息吹きを称えています。

本当の引越し迄の間の、この大きなおまけを、今、子どもたちは、植物や虫たちと生きる、確かな生活を味わっています。

一年後に引越す新園舎の庭は、本当に狭く、遊ぶどころか、そぞろ歩きの猫の額です。引越しの日には、教師も片手を天に振り上げて「北方―領土を―カーエーセー」と連呼して、大きな大きなおまけの、小さな森と芝生にお別れを告げる事になるでしょう。

皆様

赤坂方面にお出かけの時は、お立ち寄り下さいませ。この小さな森を散歩し（3分程度で終る）深呼吸をしてみませんか？

こんな小さな森でも「ああー、良い森だなあ」と身も心も、ゆったりとして森林浴にひたって下さい。

お待ち申し上げます。

（東京・霊南坂幼稚園）

